

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04257

研究課題名(和文) 身体的同期が利他性と攻撃性に及ぼす影響

研究課題名(英文) Effects of behavioral synchrony on altruism and aggressiveness

研究代表者

品田 瑞穂 (SHINADA, Mizuho)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：70578757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：身体的同期の研究は、そのほとんどにおいて向社会性の促進に焦点が当てられており、他者との協調が利他的行動や共感などの向社会性を引き出すとされてきた。これに対し本研究は、1. 他者への協調と協力は異なる規範であり、協調は時として攻撃行動を導くこと、2. 身体的同期は道徳規範と引き換えに内集団の利益が得られる状況では、道徳規範の逸脱を導くこと、3. 集団間競争規範が活性化された状況では、身体的同期は一体感を通して外集団攻撃を促進することを明らかにした。これらの結果から、身体的同期は集団内の協力行動を促進するだけでなく、時として集団間の対立を激化させる要因となることが示唆される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で扱った身体的同期は、儀礼的行為、踊りや行進、合唱など、多様な組織・集団において行われている。こうした活動の多くは集団の絆を深めることを目的として行われるが、その負の側面を説明する理論はこれまで確立されていない。本研究は、この問題に対し4つの実証的研究を行い、身体的同期を伴う集合行動は、集団の絆を深め、好意や一体感を高めることに寄与するが、集団間の競争が強調された場合には、外集団攻撃が促進されることを明らかにした。これらの知見から、身体的同期を伴う集合行動を実施する際には、集団間の対立や競争を強調するのではなく、集団内・集団間の協力を目標として実施することが重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Recent studies have shown that behavioral synchrony, in which a person moves his or her body at the same time as others, is effective in eliciting pro-sociality, such as empathy and helping behavior, as well as a sense of unity and harmony with others. This study conducted a series of studies and experiments to clarify the effect of the behavioral synchrony. The results showed that 1. Cooperation and harmony are different norms, and harmony promotes aggression in some cases; 2. Behavioral synchrony leads to a deviation from the moral norms in situations where the in-group benefits in exchange for the moral norms; 3. Behavioral synchrony promotes the out-group aggression through a sense of unity in situations where inter-group competition is activated. These results suggest that behavioral synchrony not only promotes cooperative behavior within a group, but also is a factor that sometimes intensifies conflict between groups.

研究分野：社会心理学

キーワード：協力 競争 規範 身体的同期 向社会性

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、社会的集団において行われる身体的同期 (physical synchrony) が利他的行動を促すメカニズムを検討する。身体的同期とは、例えば教会における儀礼的行為、踊りや行進、合唱など、タイミングを合わせて人々が同じ動作をする集合行動である。日常的な集合行動は、集団の絆を深め、集団内の協力関係の形成を目的として行われるが、近年、統制された実験状況においても同様に、身体的同期が利他的行動を促進する効果を持つことが報告されている (Wiltermuth & Heath, 2009)。しかしその一方、身体的同期によって他者に対する攻撃的行動が促進されることも報告されている。つまり、身体的同期は利他性と攻撃性という、一見相反する心理・行動傾向に影響することが明らかにされている。しかし、なぜ人間がそのような心理・行動傾向を備えているのかを説明する包括的な理論は未だ存在しない。これらの学術的背景から、本研究は適応論的アプローチに基づき、身体的同期がなぜ、どのような場合に利他性と攻撃性を促進するのかを説明する包括的な理論モデルを構築し、その実証的検討を行う。

2. 研究の目的

(1) 研究全体の目的

本研究の理論仮説は、人間の普遍的な心理特性は適応課題への対処として獲得されてきたという適応論的アプローチに基づいている。このアプローチからは、社会的動物である人間にとって最も重要な適応課題のひとつは、自らの生存可能性を高めるために集団に所属することと考えられる (Baumeister & Leary, 1995)。人間は自らが所属する集団 (内集団) の手がかりに敏感に反応する心理・行動傾向を持つこと、人が集団内で共有される規範に従い、規範の逸脱に対して敏感に反応する心理・行動傾向を備えている (e.g., Shinada & Yamagishi, 2004; 2007)。これらの知見に基づき、本研究では、身体的同期は重要な集団の枠組みを規定する手がかりとして機能し、その集団で共有された規範に従う行動を促進するという理論仮説を提案する。そして、この理論仮説から導かれる 1) 身体的同期を行った他者は内集団成員として認識される、2) 集団内の協力規範が焦点化された状況では内集団成員に対する利他的行動が促進されるのに対し、集団間競争規範が焦点化された状況では、外集団成員に対する攻撃的行動が促進されるという 2 つの作業仮説について、質問紙調査と実験室実験を用いた実証的検討を行う。

(2) 質問紙調査の目的

上述のように、本研究では、身体的同期によって集団規範に対する協調性が高まることで、集団内の利他的行動または集団間の攻撃行動を促進すると予測する。しかし、「和をもって貴しなす」という言葉があるように、日本をはじめとする東アジアで優勢な相互協調的文化においては、協調的な行動と利他的な行動はどちらも望ましい行動と見なされる価値観が共有されており、「他者に合わせるべき」という協調規範と、「他者と助け合うべき」という協力規範の区別がしばしば曖昧となっている。そこでまず、これらの規範を弁別する尺度を作成した上で、協力規範と調和規範、利他性・攻撃性との関連を 2 つの質問紙調査によって検討した。調査 I は 2 つの規範を測定する尺度の作成、調査 II では尺度の妥当性の確認と利他性との関連の検討を目的とした。

(3) 実験室実験の目的

本研究では、1) 身体的同期を行った他者は内集団成員として認識される、2) 集団内の協力規範が焦点化された状況では内集団成員に対する利他的行動が促進されるのに対し、集団間競争規範が焦点化された状況では、外集団成員に対する攻撃的行動が促進されるという 2 つの作業仮説を検討するため、2 つの実験室実験を行った。実験 I では、身体的同期によって集団内協力規範が活性化されることを明らかにするために、一般的な道徳規範に反する利他行動が促進されるかを検討する。実験 II では、内集団と外集団を実験室内で作り出し、集団間競争規範が活性化された状況では、身体的同期によって外集団攻撃促進されることを検討する。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査 (協調規範・協力規範と利他性・攻撃性との関連の検討)

① 質問紙の構成

質問紙は、性別・年齢などを尋ねるフェイスシート、協調規範尺度、協力規範尺度、利他性を測定する場面想定法による質問項目から構成された。

調査 I: 先行研究 (Hashimoto & Yamagishi, 2013; 登張・名尾・首藤・大山・木村, 2015) を参考に、協調規範尺度 6 項目 (「人の意見にはなるべく合わせるべきである」など)、協力規範尺度 7 項目 (「みんなで何かをやるときには進んで協力すべきである」など) からなる 5 段階評定の尺度を作成した。

調査 II: 調査 I の因子分析結果に基づいていくつかの項目を修正し、新たな項目を加え、各 6 項目からなる協調規範尺度・協力規範尺度を作成した。

利他性の測定は、仲間集団の一人が休日に「ボランティアに行く (調査 I)」「引越しの手伝いに行く (調査 II) と提案した場面を呈示し、提案に賛成してボランティアに行く (または手伝いに行く) と思う程度を 5 段階で尋ねることで測定した。

攻撃性の測定は、仲間集団の一人が休日に遊びに行く際にあるメンバーを排斥しようとする提案した場面を呈示し、提案に賛成して排斥する (関係性攻撃を行う) と思う程度を 5 段階で尋ねることで測定した。

③調査対象者・時期・手続き

調査 I：首都圏の大学生 166 名（有効回答数 164 名、女性 99 名、男性 64 名、不明 1 名）・2017 年 5 月・心理学の講義の前後などに回答を依頼し、配布・説明・回収を行った。回答にかかる時間は 10 分程度だった。

調査 II：首都圏の大学生 579 名（有効回答数 550 名、女性 350 名、男性 220 名）・2017 年 9 月～2018 年 4 月、心理学の講義の前後などに回答を依頼し、配布・説明・回収を行った。回答にかかる時間は 10 分程度だった。

(2) 実験室実験（身体的同期が利他行動と攻撃行動に及ぼす影響の検討）

①身体的同期の操作

実験 I：先行研究 (Reddish, Fischer, & Bulbulia, 2013)

を参考に、コンピューターを用いて他の実験参加者

とやりとりをする「コミュニケーション課題」を実施した。実験参加者は、コンピューター画面を通して別室にいるほかの参加者の無音の映像を見ながら、メトロノームの音（65 bpm）に合わせて 3 分間手を叩く課題を 2 試行にわたり行った。統制のため、画面上の他の参加者の顔は見えず、胸から下のみが映し出されていた。同期条件（ $n=35$ ）では、「動きを相手と合わせるように」教示した。非同期条件（ $n=37$ ）では、相手には違う音が聞こえていること、自分に聞こえる音に合わせて手を叩くことを教示した上で、相手が違うテンポ（75 bpm）で手を叩いている映像を呈示した。各試行の終了後、相手への評価等を尋ねる質問紙に回答した。

実験 II：実験 I と同様、メトロノームの音に合わせて手を叩く課題をペアで行ってもらった。ただし、実験 II では外集団攻撃を測定するため、実験室内に 2 つのペアを設定した。同期条件では、各実験参加者は、ペアの相手と同じメトロノームの音（30 bpm または 40 bpm）をヘッドフォンから聞き、音に合わせて手を叩く 1 分間の課題を 2 試行にわたり行った。非同期条件では、ペアのそれぞれが異なるメトロノームの音（30 bpm または 40 bpm）をヘッドフォンから聞き、自分の聞こえる音に従って手を叩く 1 分間の課題を 2 試行にわたり行った。2 試行が終了後、相手への評価等を尋ねる質問紙に回答した。

②実験参加者・時期・手続き

実験 I：首都圏の大学生 72 名（女性 59 名、男性 13 名）・2017 年 11 月～12 月・心理学の授業を通して実験参加者を募集した。実験参加者は実験室に到着後、同意書に署名した上で、①の身体的同期課題を行い、質問紙に回答した。次に③の意思決定課題を行い、事後質問紙に回答した。最後に実験の目的などについて説明を受けた後、謝礼を受け取り退室した。

実験 II：首都圏の大学生 73 名（女性 54 名、男性 19 名）・2019 年 10 月～11 月・心理学の授業を通して実験参加者を募集した。実験参加者は実験室に到着後、カーテンで仕切られた小ブースに入り、同意書に署名した上で、①の身体的同期課題を行い、質問紙に回答した。次に③の意思決定課題を行い、事後質問紙に回答した。最後に実験の目的などについて説明を受けた後、謝礼を受け取り退室した。

③利他行動・攻撃行動の指標

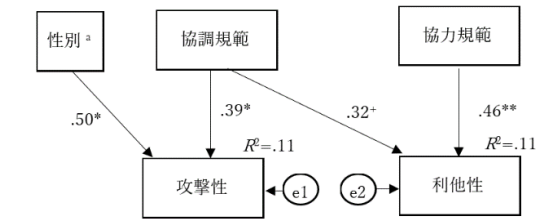
実験 I：集団内利他行動を測定するため、Die-under-the-cup パラダイム (Shalvi, Dana, Handgraaf, & De Dreu, 2011) を用いた。このパラダイムでは、実験参加者に紙コップの中でサイコロを振ってもらい、コップの底に開いた穴から目を確認して報告してもらう。出た目に比例してもう 1 人の実験参加者が報酬を受け取ることができる。出た目が何かは参加者にしか知りえないため、虚偽の報告も可能である。したがって、一般的な道徳規範（正直であること）と、利他性が対立する状況となっている。本研究では、身体的同期によって集団内協力規範が活性化され、道徳規範に反する利他行動が促進されると予測する。このため、同期条件において非同期条件よりも虚偽の報告が多く、報告される目の数が大きくなるという作業仮説を立てた。

実験 II：集団間攻撃行動を測定するため、以下の報酬分配課題を開発した。この課題では、はじめに内集団（自分のペア）と外集団（ほかのペア）のそれぞれに 20 の資源（チケット）が配分された。次に実験参加者は、内集団（自分のペア）か、外集団（ほかのペア）のうちどちらかが、他の集団の資源をそれぞれ 10 枚まで奪うことができると教示された。また、他の集団から奪った資源は、自分のものにすることはできず、自分のペアの相手に与えることができると教示された。このとき外集団から奪った資源の数を、集団間競争規範が活性化された場合の外集団攻撃行動の指標とした。次に、実験参加者は、自分が自由に他の 3 人に配分される資源を 0～20 の範囲で自由に決められる場合、それぞれにいくらの資源を与えるかを決定した。このとき内集団成員に与えた資源の数を、内集団協力行動の指標とした。また、内集団に与えた資源数から外集団に与えた資源数（1 人あたり）を引いた値を内集団ひいき行動の指標とした。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査（協調規範・協力規範と利他性との関連の検討）

調査 I：探索的因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）の結果、因子負荷量の低い項目を除外し計 8 項目を抽出した。そのうち 5 項目が協調規範尺度（ $\alpha=.80$ ）、3 項目が協力規範尺度（ $\alpha=.65$ ）に分類された。相関分析を行ったところ、協力規範と利他性の間に正の相関（ $r=.30, p<.01$ ）



*男性=1, 女性=0

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.1$ GFI = .97, AGFI = .93, CFI = 1.00, RMSEA = .00

図 1 質問紙調査 I における主要な変数間の関連

がみられ、協調規範と利他性の間にも正の相関 ($r=.23, p<.05$) がみられた。一方、協調規範は攻撃性とも正の相関 ($r=.25, p<.05$) がみられたが、協力規範と攻撃性には関連はみられなかった ($r=-.11, n.s.$)。

主要な変数間の関連を構造方程式モデリング (最尤法) によって分析した (図1)。その結果、協力規範は利他性と、協調規範は攻撃性と有意な関連がみられた。以上の結果から、身体的同期によって集団への協調が促進された場合、利他性だけでなく攻撃性も活性化する可能性が示唆された。ただし、協力規範尺度の信頼性係数が低かったため、項目を修正・再構成し調査IIを行った。

調査II：探索的因子分析 (最小二乗法、プロマックス回転) の結果、想定した通りの因子が得られ、各因子の信頼性係数も一定の基準を満たしていたため、各因子の平均得点を尺度得点として算出した (表1)。相関分析を行ったところ、協力規範と利他性の間に正の相関 ($r=.20, p<.01$) がみられ、協調規範と利他性の間にも正の相関 ($r=.11, p<.05$) がみられた。一方、攻撃性と両尺度との間には相関関係がみられなかった ($r<.1$)。このため、利他性を従属変数、協力規範と協調規範、性別を独立変数とする重回帰分析を行ったところ、協力規範の標準化回帰係数のみが有意であった ($\beta=0.20, SE=0.11, p<.001$; 協調規範: $\beta=0.01, SE=0.09, n.s.$; 性別: $\beta=0.04, SE=0.11, n.s.$)。また、性別ごとに攻撃性を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、女性 ($n=349$) において、協調規範の標準化回帰係数のみが有意であり ($\beta=0.14, SE=0.10, p<.05$)、協力規範の標準化回帰係数は有意ではなかった ($\beta=-0.08, SE=0.13, n.s.$)。男性においてはいずれの規範の係数も有意ではなかった。以上より、協力規範は利他性と一貫した関連がみられるが、協調規範と攻撃性との関連には性別による違いがみられた。

実験I：身体的同期後に、同期を行った他者に対する好意や協力の認識が促進されることを検討するため、事後質問紙で測定した項目の平均得点を条件間で比較した (表2)。質問項目は先行研究 (Lang, Bahna, Shaver, Reddish, & Xygalatas, 2017) で用いられた5段階評価の項目を翻訳して用いた。その結果、先行研究と一貫して、同期群では非同期群に比較して、他者への好意、注意、自他の重なり (一体感)、協力の認識が有意に高いことが示された。

本実験で用いたDie-under-the-cupパラダイムでは、各実験参加者が虚偽の報告をしていたかを知りえる手段はないため、群ごとの分布を検討する (図2)。虚偽の報告がない場合には、理論的には目の数は一様分布となるため、まず、条件ごとに一様分布であるかの検定を行った。その結果、非同期条件における報告された目の数は、一様分布と有意差はなく ($\chi^2(5)=5.00, n.s.$)、同期条件における目の数は一様分布とは異なっていた ($\chi^2(5)=16.26, p<.05$)。報告された目の数について、マンホイットニーのU検定で条件差を検討したところ、有意差がみられた ($Z=2.40, p<.05$)。したがって、同期条件では非同期条件よりも大きな目が報告されるという作業仮説は支持された。つまり、身体的同期は一般的な道徳規範に反していたとしても、同期を行った他者に対する利他性を促進する効果

表1 調和規範尺度と協力規範尺度の因子分析の結果

番号	項目	F1	F2	共通性
因子1：調和規範 ($\alpha=0.79, M=3.01, SD=0.70$)				
3	人の意見には、なるべく合わせるべきである。	0.82	-0.03	0.65
9	なるべく人に合わせるべきである。	0.81	0.01	0.66
1	自分の仲間との間では、意見の不一致が生じないようにすべきである。	0.73	-0.09	0.50
5	もめごとが起こらないようにするのは、当然のことである。	0.67	-0.04	0.43
11	個人的な目標の達成よりも、人との良好なつきあいの方を大切にすべきである。	0.61	0.21	0.49
10	人と意見が対立したときには、相手の意見を尊重するべきである。	0.39	0.28	0.30
因子2：協力規範 ($\alpha=0.70, M=3.70, SD=0.57$)				
7	みんなで協力して何かをやり遂げる必要はない*。	-0.33	0.77	0.55
2	みんなで何かをやるときには進んで協力するべきである。	-0.02	0.74	0.54
6	ときには、所属する集団のために、自分の利益を犠牲にすることも必要である。	0.10	0.56	0.36
8	みんなで協力することを第1に考えて行動するべきである。	0.32	0.51	0.46
12	人との関係が悪くならないように、配慮して行動するべきである。	0.30	0.44	0.36
4	個人プレーよりチームプレーに徹するべきである。	0.37	0.42	0.41
寄与率		2.98	2.02	
因子間相関		0.30		

*は反転項目をあらわす。

表2 実験Iにおける同期・非同期課題後の質問紙の回答

変数	第1試行後		第2試行後		条件	主効果 F	交互作用 F
	同期 M(SD)	非同期 M(SD)	同期 M(SD)	非同期 M(SD)			
同期の認識 (4項目)	3.56 (0.85)	1.70 (0.61)	3.70 (0.94)	2.08 (0.82)	F	101.58**	9.28**
相手への注意 (3項目)	3.16 (0.91)	2.67 (0.89)	3.26 (0.88)	3.02 (0.83)	F	67.21**	11.21**
自他の重なり (5項目)	4.13 (0.70)	2.21 (0.68)	4.29 (0.66)	2.41 (0.86)	F	25.11**	3.25
協力の認識 (6項目)	3.24 (0.86)	2.16 (0.69)	3.49 (0.90)	2.33 (0.89)	F	35.37**	12.73**
相手の好ましさ (2項目)	3.09 (1.06)	2.53 (0.87)	3.29 (0.96)	2.49 (0.93)	F	10.10**	1.17

* $p<.05$ ** $p<.01$

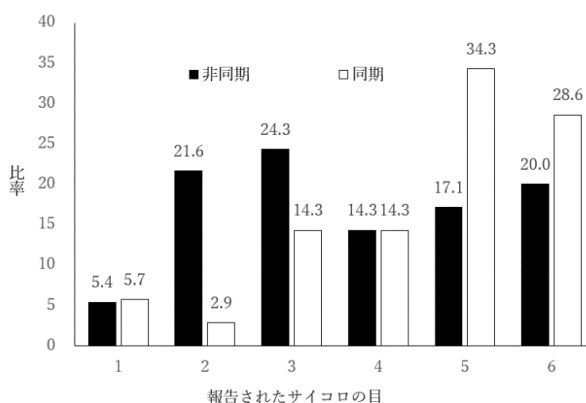


図2 実験Iにおける身体的同期と利他行動の関連

を持つと考えられる。

実験 II：本研究では、身体的同期が集団の枠組みを規定すると想定するため、ペアを構成する 2 人があらかじめ知り合いである場合には、既存の集団の枠組みが影響する可能性がある。このため、初対面のペアであることが事後質問紙で確認できた 55 名（女性 36 名、男性 19 名）を以下の分析の対象とした。まず、身体的同期を行った他者に対する好意や協力の認識が促進されることを検討するため、事後質問紙で測定した項目の平均得点を条件間で比較した（表 3）。その結果、実験 I と同様に、すべての指標について、非同期条件に比較し同期条件において平均値が有意に高いことが示された。

次に、身体的同意によって外集団攻撃行動が促進されるという仮説を検討するため、外集団攻撃行動（外集団から奪った資源の数）について、マンローホイトニーの U 検定で条件差を検討したところ、片側検定で有意差がみられた（同期条件： $M=6.33$, $SD=3.99$; 非同期条件： $M=4.39$, $SD=3.59$; $Z=1.86$, $p<.05$ ）。内集団協力に関しては条件差はみられず（同期条件： $M=13.17$, $SD=5.75$; 非同期条件： $M=13.58$, $SD=6.23$; $Z=-0.30$, *n.s.*）、内集団ひいきに関しては片側検定で有意傾向であった（同期条件： $M=2.79$, $SD=3.72$; 非同期条件： $M=1.48$, $SD=4.12$; $Z=1.62$, $p<.10$ ）。また、外集団攻撃行動、内集団協力行動、内集団ひいき行動との関連をスピアマンの相関係数によって検討したところ、同期の認識（ $r=0.31$ ）および自他の重なり（ $r=0.36$ ）と、外集団攻撃との間に有意な正の相関がみられた。また、自他の重なりは内集団ひいきとも正の関連があった（ $r=0.27$ ）。自他の重なりは、自分と他者の類似性や一体感の認識をさす。また先行研究（Valdesolo & Desteno, 2011）では、身体的同期は類似性の知覚を高めることを通して、他者への同情や援助行動を促すといった向社会的な影響が指摘されている。これに対し、本研究の結果は、集団間競争規範が活性化された状況では、身体的同期は類似性の知覚を高めることを通して、外集団攻撃や内集団ひいきを促進する可能性を示唆している。

身体的同期の研究は、そのほとんどにおいて向社会性の促進に焦点が当てられており、他者との協調が利他的行動や共感などの向社会性を引き出すとされてきた（Rennung & Göritz, 2016）。これに対し本研究は、1. 他者への協調と協力は異なる規範であり、協調は時として攻撃行動を導くこと、2. 身体的同期は道徳規範と引き換えに内集団の利益が得られる状況では、道徳規範の逸脱を導くこと、3. 集団間競争規範が活性化された状況では、身体的同期は一体感を通して外集団攻撃を促進することを明らかにした。これらの結果から、身体的同期は集団内の協力行動を促進するだけでなく、時として集団間の対立を激化させる要因となることが示唆される。

本研究で扱った身体的同期は、儀礼的行為、踊りや行進、合唱など、多様な組織・集団において行われている。こうした活動の多くは集団や共同体の絆を深めることを目的として行われるが、その負の側面に関してはこれまで注目されてこなかった。本研究では、これらの集合行動は、実際に集団の絆を深め、好意や一体感を高めることに寄与するが、集団間の競争が強調された場合には、外集団攻撃が促進されることが明らかになった。これらの知見から、身体的同期を伴う集合行動を実施する際には、集団間の対立や競争を強調するのではなく、集団内・集団間の協力を目標として実施することが重要と考えられる。

表 3 実験 2 における同期・非同期課題後の質問紙の回答

変数	同期	非同期	<i>t</i>	相関係数		
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)		攻撃	協力	ひいき
同期の認識 (4 項目)	4.36 (0.95)	2.23 (0.95)	-9.45**	0.31*	0.01	0.23
相手への注意 (3 項目)	4.14 (0.79)	2.99 (1.02)	-4.56**	0.17	0.08	0.12
自他の重なり (5 項目)	3.48 (0.13)	2.35 (0.13)	-2.32*	0.36**	-0.01	0.41**
協力の認識 (6 項目)	3.37 (0.11)	2.18 (0.90)	-5.63**	0.19	0.06	0.27*
相手の好ましさ (2 項目)	3.29 (0.95)	2.66 (1.03)	-2.32*	0.06	0.22	0.07

* $p<.05$ ** $p<.01$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Mizuho Shinada
2. 発表標題 Synchrony and Pro-Social Lying
3. 学会等名 the 30th APS (Association for Psychological Science) Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mizuho Shinada
2. 発表標題 Why Do We Ostracize a Group Member? : The Effect of Cooperation and Conformity.
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 品田瑞穂
2. 発表標題 身体的同期が望ましくない利他行動に与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 品田瑞穂
2. 発表標題 調和規範と協力規範が排斥行動に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mizuho Shinada
2. 発表標題 Synchrony enhances in-group altruism and inter-group competition.
3. 学会等名 The 32th Association for Psychological Science Annual Convention. (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>東京学芸大学社会心理学研究室 (品田瑞穂) http://www.u-gakugei.ac.jp/~shinada/index.html</p>

6. 研究組織		
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)
		備考